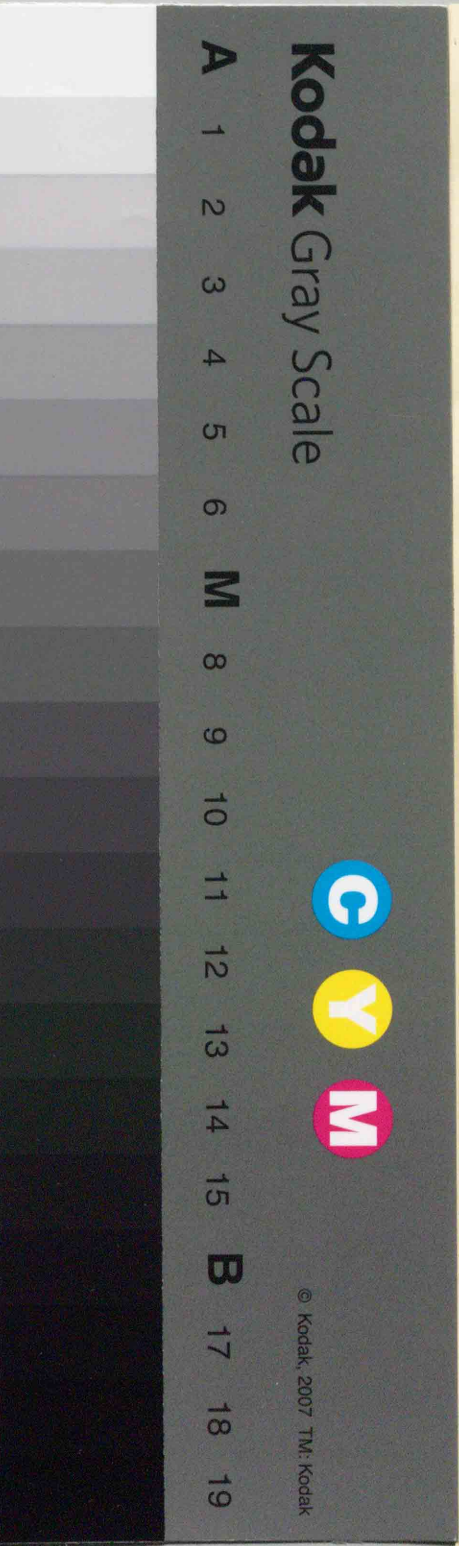
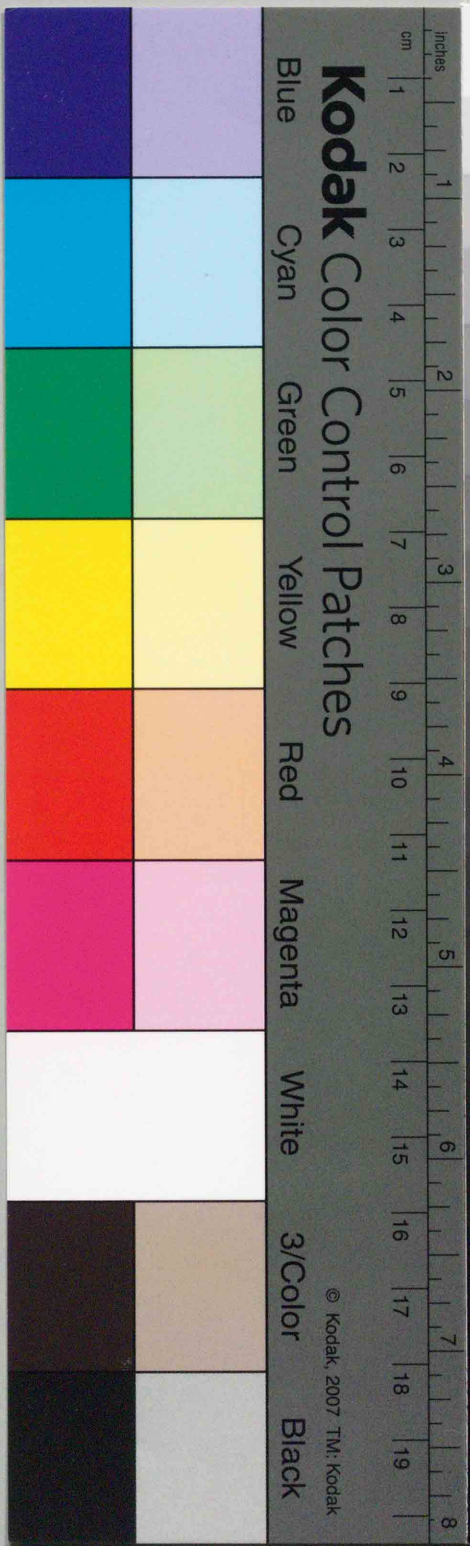


教科書文庫
4
110
31-1910
2000065004



40455

教科書文庫

4
110
31-1910
2000.0 65004



資料室

教科書文庫
4
110
31-1910
2000065004



尋常小學校修身書卷三

文部省

兒童用



広島大学図書
2000065004

2
3
4
5
6
7
8
9
10

Handwritten notes in cursive Japanese characters, including names like '近藤' (Imoto) and '太三郎' (Taichiro).

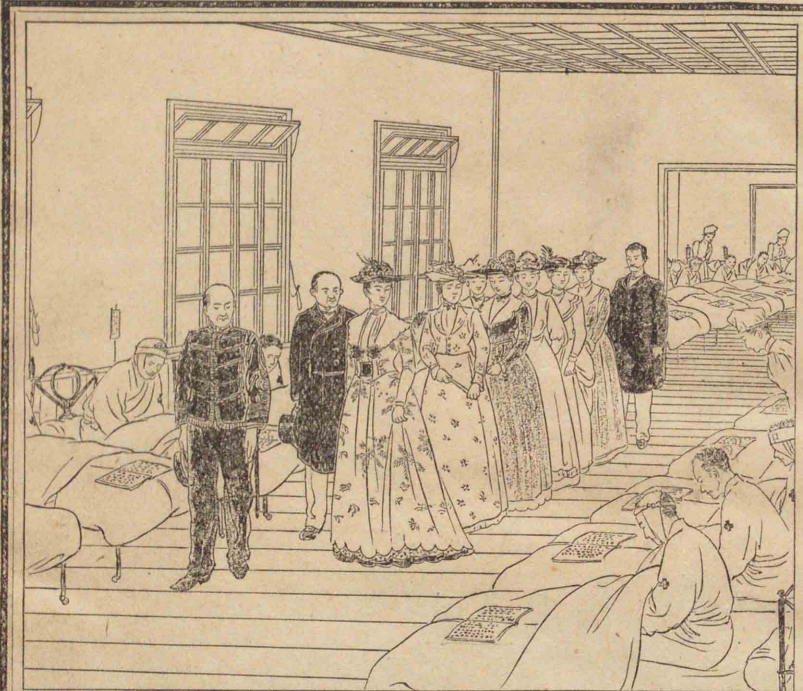
325.9
M014

近藤 太三郎
近藤 辰三郎

もくろく

第一	くわうごうへいか	一
第二	ちゆうくん	二
第三	かうかう	三
第四	兄弟 <small>きょうだい</small>	四
第五	べんきやう	六
第六	きりつ <small>(規律)</small>	七
第七	しやうちき	九
第八	友だち	十
第九	師をうやまへ	十一
第十	きそくにしたがへ	十三
第十一	ぎやうき	十五
第十二	ゆうき	十六
第十三	かんにん <small>(堪忍)</small>	十八
第十四	物ごとにあわてるな	十九
第十五	祝日	二十一
第十六	くわうしつをたつとべ	二十二
第十七	けんやく	二十三
第十八	じぜん <small>(慈善)</small>	二十四
第十九	おんをわすれるな	二十六
第二十	けんそん <small>(謙遜)</small>	二十八
第二十一	くわんだい <small>(寛大)</small>	二十九
第二十二	けんかう <small>(健康)</small>	三十
第二十三	じぶんの物と人の物	三十二
第二十四	きやうどう <small>(共同)</small>	三十三
第二十五	近所の人 <small>きんじよ</small>	三十五
第二十六	こうえき <small>(公益)</small>	三十六
第二十七	よい日本人	三十八

第一 くわうごうへいか



くわうごうへいか
 はびやうるんへお
 いでになつて、きざ
 をうけたぐんじん
 や、びやうきになつ
 たぐんじんをおみ
 まひになりました。

皆皆なみだをながして、大そうありがたがり
りました。

第二 ちゆうくん

和氣清麻呂はうさは
ちまんの神の御
をしへをうけたま
はつてまゐりまし
た。しんかのみぶん



尋修三

で天皇の御くらゐをのぞむやうなものは、
早くのぞくと、神がおつげになりました。と、
道鏡だうきやうのきいてゐるのもおそれず、天皇に申
し上げました。

第三 かうかう

渡邊登わたなべのぼるはうちがまづしい上に、父がびやう
きになつたので、うちのくらしをたすける
ために、魚をかくことをけいこしました。又

長い間父のかんび
 やうをして、少しも
 おこたりませんで
 した。

父母ノオンハ山
 ヨリモ高く、海ヨ
 リモフカシ。

第四 兄弟きやうだい



尋修三



なりました。その時登は雪がふつてさむい

うちがまづしかつた
 ため、登の弟やいもう
 とは、皆早くからよそ
 へやられました。登が
 十四の年、八つばかり
 になる弟もほかへつ
 れられて行くことに

のに、とほい所までおくつて行つて、なくな
くわかれました。

第五 ベんきやう

登はゑを賣つてう
ちのくらしをたす
けながら、なほな
ほゑのけいこ
をはげみまし



尋修三

尋修三

た。又その間にがくもんもしました。がくも
んするひまが少いので、毎朝早くおきて、ご
はんをたき、その火のあかりで本をよみま
した。

カンナン、ナンヂヲタマニス。

第六 きりつ

登はだんだんと重い役に取立てられまし
たが、日日のしごとのじこくをさだめてお



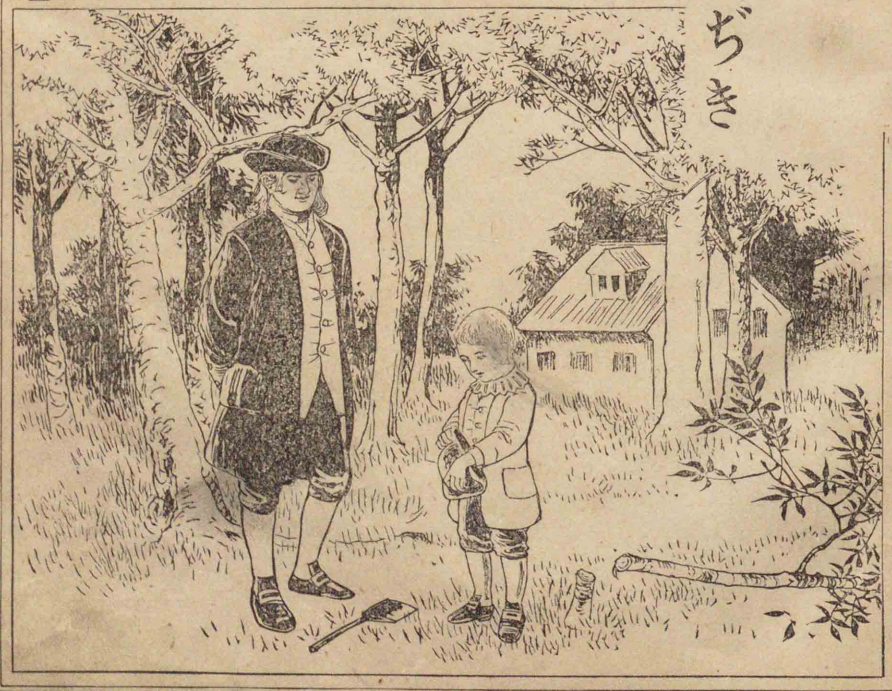
いて、毎日その通り
 おこなひました。こ
 のやうにきりつた
 だしくしましたの
 で、ゑも大それ上手
 になり、がくもんも
 すすんで、のちには
 えらい人になりま

尋修三
 三修三

した。

第七 しゃうぢき

ワシントンには
 へあそびに出て、父
 のだいにしてゐ
 たさくらの木を切
 りたふしました。こ
 れはだれが切つた。



九

と父にたづねられた時、「私が切りました」と、かくさずに答へてわびました。父はワシントントンのしやうぢきなことをよろこびました。これはワシントンの六さいの時のことでありました。

第八 友だち

昔ほそへいしう細井平洲といふがくしやがありました。なかのよい友だちがたよつて来た時、長い



第九 師をうやまへ

間うちにとめておいて、いつしよにむつましくくらししました。きんじよの人たちは、まことの兄弟だと思つてゐました。

上杉鷹山は平

洲を先生にし

てがくもんをしま

した。ある年平洲をじぶ

んの國へまねきました。平

洲が来た時、鷹山はみぶん

の高い人でありましたが、わざ

わざとほくまで、むかへに出てて



いねいにあいさつをしました。それからき
んじよの寺に行つて休みましたが、途中じ
ぶんが先生よりさきに立つやうなことは
しませんで、ふかくうやまひました。

第十 きそくにしたがへ

春日局かすがのつげねは、ある夜おそく、おしろにかへつて
来ました。門がしまつてゐたので、あけさせ
ようとしましたら、門ばんの役人が上役の



ゆるしがあるまでは
お通し申すことは出
来ません。と言ひまし
た。局は「それはもつと
もなこと。」といつて、さ
むい夜風にふかれな
がら、門のあくまで外
に待つてゐました。

第十一 ぎやうぎ

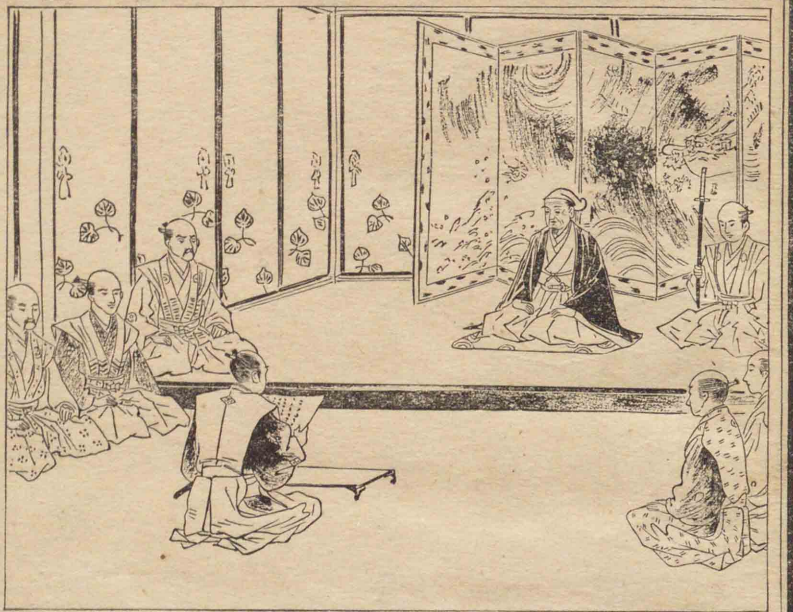
松平好房まつだいらよしふさは小さい時からかりそめにも、父
母の居る方に、足をの
ばしたことはありま
せんでした。よそに行
くときも、かへつて來
たときも、かならず父
母の前に出て、そのこ



とをつげました。父母からいたただいた物は
たいせつにして、いつまでも持つてゐまし
た。又人が父母のはなしをすると、いつもた
だしく居なほつてききました。

第十二 ゆうき

木村重成は豊臣秀頼のけらいで、ゆうきの
ある人でありました。秀頼が徳川家康とい
くさをした時、重成は二十さいばかりであ



りつぱに役目をしとげてかへりました。

りしましたが、いさまし
いはたらきをしまし
た。間もなく秀頼が家
康とわぼくをするこ
とになつた時、重成は
家康の所へ使ひに行
つて、おめずおくせず

第十三 かんにん

ある時小坊主ぼうずが重成
をさんざんののしつ
た上、打つてかからう
としたことがありま
す。けれども重成はさ
からはずにこらへて
るました。見てゐた人



寺修三

人は重成をおくびやうものと思ひました。
その後、重成がいくさに出て、いさましくは
たらきましたので、ほんたうのゆうきのあ
る人だと、皆皆かんしんしました。

ナラヌカンニン、スルガカンニン。

第十四 物ごとにあわてる存

毛利吉就もうりよしなりのおくがたは、きんじよにくわじ
があつた時、けらいの人人から早く立ちの

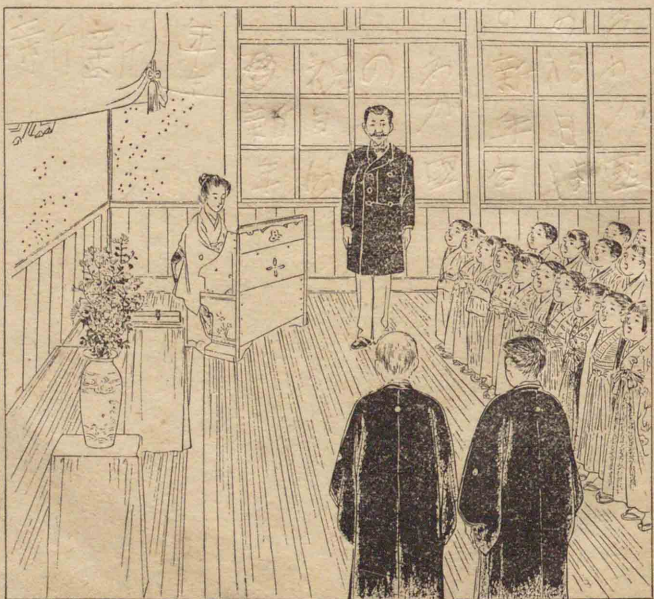


しきはぶじにのこりました。

くやうにとすすめられ
 ました。おくがたは
 おちついてゐて、かへ
 つて人人のあわてる
 のをとどめ、荷物をか
 たづけたり、火をふせ
 いだりさせたので、や

第十五 祝日

わが國の祝日は、新年
 ときげんせつと天長
 せつとであります。新
 年は年のはじめ、きげ
 んせつは神武天皇の
 御くらるにおつきになつた日、天長せつは
 天皇へいかのおうまれになつた日で、いづ



れもめでたい日であります。

第十六 くわうしつをたつとべ



徳川とくがは光圀みつくにはふかくくわうしつをたつとんだ人であります。人人に日本のよい國がらであることを知らせて、ちゆうぎの心をお

こさせるために、多くのがくしやを集めて、日本のれきしを書かせました。又楠木くすのき正成まさしげのせきひをみなとがはに立てて、そのちゆうぎをあらはしました。

第十七 けんやく

徳川光圀は、ちよちゆうたちが紙をそまつにするので、紙すきはを見せにやりました。ちよちゆうたちは、紙すき女が冬の寒い日

に、水の中ではたらいてゐるのを見て、紙をこしらへるのは、たやすい事ではないとさとりました。それから紙をむえきに使はないやうになりました。

第十八 じぜん



昔ききんのあつた時、鈴木今右衛門ふうふは、田はたや着物を賣つて、多くの人をすくひました。その子にこの時十二さいになるむすめがありました。がある寒い日同じ年ごろの女の子が物も

らひに來ました。それを見て、母はむすめに
あの子はひとへ物一枚でふるへてゐます。
おまへの着てゐるわたいれを一枚ぬいで
やりませんか。と言ひました。むすめはすぐ
によい方のわたいれをぬいでやりました。

第十九 おんをわすれるな

彌兵衛の主人が島流しになりました。彌兵
衛は主人のみの上をあんじ、島へ見まひに

行きたいと思つて、先
づ一心に船をこぐ事
を習ひました。それか
ら船のりになつて、は
るばる島に渡つて、主
人にあひました。その
のち、主人がゆるされてかへつてからも、し
んせつにせわをして、よくつかへました。



第二十 けんそん



ぶんはおよばない。と言ひ、晋作もまた、久坂

よしだ 吉田松陰に久坂玄瑞
たか 高杉晋作といふ二
人のすぐれたでしが
ありました。玄瑞はつ
ねに晋作をほめて、高
杉君はえらい人だ。じ

君はりつばな人だ。じぶんはおよばない。と
言つて玄瑞をほめました。松陰は二人がた
がひにけんそんしてほめ合つてゐるのを
きいて、大そうよろこびました。

第二十一 くわんだい

昔貝原益軒かひばらえきけんといふ名高いがくしやがあり
ました。ある日るすの間に、一人のでしが、と
なりのわかものとは、にはですまふをとつて、

益軒が大切にしている
たぼたんの花ををり
ました。ではしんぱ
いして、人にたのんで
あやまちをわびても
らひましたが、益軒は
笑つて、そのままゆるしました。

第二十二 けんかう



益軒は小さい時には、からだか弱かつたの
で、つねづねやうじやうをしました。それで
からだか次第にぢや
うぶになつて、八十五
さいまでも長生をし、
多くの本をあらはす



ことが出来ました。

クスリヨリ、ヤウジヤウ。

第二十三 じぶんの物と人の物

馬子が家にかへつて馬のくらをおろすと、
さいふが出ました。これはさ
きにのせたお客のわ
すれたものだらうと
思つて、すぐにその
やどやにかへしに
行きました。お客は



大それたよろこんで、おれいの金を出しまし
たが、馬子は「あなたの物をあなたがうけ取
るに、何でおれいがいらいますか。」と言つて、な
かなかうけ取りませんでした。

第二十四 きようどう

としよりが子どもたちに、「この三本のぼう
を立てて、その上に魚本をのせてごらん。」と
言ひましたが、誰にも出来ませんでした。そ



しよりは「一本づつでは立たないが、三本い
つしよになると、このやうに立つて、魚本が

の内一人の子ども
がぼうをよせて、ひ
もで中ほどをくく
り、はしをひらいて、
その上に魚本をの
せました。そこで、と

のります。人もきようどうすれば、一人一人
で出来ない事もよく出来ます。」と言つでき
かせました。

第二十五 近所の人

佐太郎はうちがまづしかつたけれども、よ
く近所の人たちにしんせつをつくしまし
た。ある時、近所の人の家のやねがそんじて
ゐるのを見て、村の人たちから、おらを少し


づつもらひ集め、じぶんも出してそれを直させました。又くわじにあつた人には、じぶんのやぶから竹をきつて来ておくりました。

第二十六 ころえき



かけかへました。それから、こはれること

佐太郎は村役人になりました。村のわうらいの土橋が度度そんなじで、人人がなんぎをするので、佐太郎は仲間の人たちとさうだんし、それを石橋に

もなく、皆皆よろこびました。そのほかに
もいろいろ村のこうえき  なる事をしま
したので、佐太郎は村役人のかしらにあげ
られました。

第二十七 よい日本人

よい日本人になるには、忠義の心を持ち、父
母にかうかうをつくし、兄弟仲よくし、先生
をうやまひ、友だちにはしんせつにし、近所

の人にはよくつきあはなければなりません。
ん。

正直でけんそんで、心はくわんだいに、じせ
んの心もふかく、人から受けた恩をわすれ
ず、人ときようどうしてたすけ合ひ、きそく
にはしたがり、じぶんの物と人の物とのわ
かちをつけ、又せけんのためにこうえきを
はからなければなりません。

そのほか、ぎやうぎをよくし、かくもんをは
げみ、からだのけんかうにきをつけ、きりつ
をただしくし、ゆうきをやしなひ、又かんに
んや、けんやくの心がけがなければなりま
せん。

かやうにじぶんのおこなひをつつしんで、
よく人にまじはり、よのため、人のためにつ
くすやうに心がけると、よい日本人になれ

ます。

をほり

明治四十三年八月廿四日 翻刻印刷
明治四十三年九月五日 翻刻發行

尋常小學修身書卷三

定價金五錢



著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

翻刻
發行者

東京市日本橋區新右衛門町十七番地
日本書籍株式會社

代表者 大橋新太郎

印刷者

東京市小石川區及堅町百。八番地
愛 敬 利 世

印刷所

東京市小石川區及堅町百。八番地
博文館印刷所

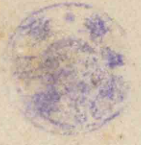
明治四十四年八月廿六日
文部省檢査濟

(一七五二)

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

近
藤
十
五
日



中野今西

近藤キサヲ

広島大学図書

2000065004

